

関東・東北豪雨災害に係る水海道排水機場の対応について

Q 1 水海道排水機場が動かなかったのは、管理者である改良区の大きな瑕疵ではないのか

A 1 水海道排水機場は、新八間掘川が整備され、昭和55年度に国土交通省により八間掘川排水機場が設置されてからは、運転回数がめっきり減り、運転実績は、ほとんどありません。

前回、直近で動かしたのは平成5年頃（正しくは平成4年5～6月）と説明しましたが、これは新八間掘川に石洗堰という堰を建設するための工事の際に、川の水が新八間掘川に行かないように、旧八間掘川に引き込んで排水したものです。つまり、工事用の仮排水のために動かしたものであり、洪水対策として動かしたものではありません。

県土木部が策定した八間掘川の河川整備計画には、既に水海道排水機場の位置づけはなく、全量を鬼怒川に流下させる計画となっており、これにより、水海道排水機場は一定の役割を終えていたものと考えております。

しかし、水海道排水機場は、老朽化が著しいながらも施設が現存していることから、多少なりとも非常時の排水に貢献できるのでは考え、改良区としてできる範囲で管理に努めてきたものです。

残念ながら、今回の水害では、ポンプ1台を1時間しか稼働させることができず、完成後60年以上を経過し耐用年数を大きく超えた水海道排水機場を管理して運転すること自体に無理があったと感じているところです。

また、仮にポンプ3台が稼働したとしても、決壊した鬼怒川堤防から流入した大量の水や雨水排水が八間掘川を通って流下してくる水量に比べれば、機場の排水能力は、はるかに小さいものです。このため、河川水位の上昇は避けられず、機場内へ河川水の侵入が始まつた時点でポンプを停止せざるを得なくなつたと予想され、今回の被害軽減には、ほとんど貢献できなかつたのではと考えております。

Q 2 水海道排水機場は平成4年以前では、いつ動かしたのか。

A 2 昭和61年に小貝川が決壊した際には動かしましたが、フル運転ではなく、旧八間掘川に入ってきたしまった水をポンプ1台で排水していました。当時も、主たる排水は鬼怒川に吐き出していたのではないでしょうか。

Q 3 八間掘川の河川整備計画から水海道排水機場の位置づけが無くなつたのはいつか。

A 3 改良区ではわかりません。また、その通知も改良区には無かつたと思ひます。